生産量は昭和三十二年の九一万三九一八俵で、県下の三分の一を維持していることが分った。

また高司校部のお話によると、全国的に見た大分県の木炭生産の位置は僅か五%位で、「窯神に例をとるとキンケン位のものであろう」と。また「主だった生産県の主位、島根、鳥取が京阪神の中心で、西日本が全国の二分の一を占め、東北の宮城、山形、福島が東京方面へ移出されている。ともかく木炭生産県とは裏返して云えば後進県ということを意味している」という。話をきいて郷土の地域性を考える上に、おもしろい観察だと思った。

番匠川に沿って船を浮べた木炭問屋の位置は、池船橋の上手で終り、新に下流の長島川や中江川を利用して、鍵野、内田、桧垣、古川、成迫、野々下、麻生寺の集落時代を迎えたのである。これと相呼応して昭和八年、幹線道路の埋立にともなって敷地の拡張、機械化による企業の近代化大型化が進み始めた。また この間、航空隊建設のため商業所は軍事所と結合し、林産業の繁栄もつづくが共に遊興の街とも化していった。

この頃船頭所の豪の岸辺には、れ十九浦の定期船（ボロシ）が盛ひしめき合い、一時は佐伯の商業港としての表玄関の様相を呈していた。しかしここを通過する木炭を運ぶ荷役船、浦々人々を運ぶ定期船、葛からくる回漕船、薄江、茅水津の大型船、住吉の入江に浮ぶ漁船等各種の船が、それぞれの場所に碇泊し、用を足すにはあまりにも水深が浅すぎた。考えてみると、ここらの地域が使用不能となるのは時間の問題であったのだ。三角洲を形成する番匠川の性質からして当然の宿命である上に、戦争による原木の乱伐がその時期を一層早くした。明治の末年から大正にかけて土蔵屋敷の使用価値が減少し消滅したように、昭和二十年を契機に、船頭所、住吉の浜も、使用価値が減少したばかりでなく、港としての機能を失った。

今次の敗戦後、佐伯における民間の船が碇泊する港は、すでに河の時代は終り、直接豊後水道の謀に当る筈が、佐伯の表玄関となったのである。

（この項終り）

探訪記

竹田から高千穂の古跡をめぐる

―佐伯史談会三月の定例行事―

高木嘉吉

三月二十三日、竹田から高千穂へと、史跡名勝や神話の跡を訪ねて、快適な一日を過した。

竹田、高千穂間は初めてのコースであった。他の会員もそうした人が多く、これが今回の旅行の大きなみかであった。旅は曽遊の地よし、初めての地亦よし。それぞれに趣きのあるものである。私は竹田、高千穂間は祖母山の麓をめぐって九州山脈を横断し、大分から熊本、熊本から宮崎と山岳部を通過するので、山又山、そして密林を縫って車が走るのではないかと想像していた。しかしこれは全くあてがはずれて、雄大な高原、人煙まれな里、きれいな草原の景観に接して感歎き久しくした。私達が郷土史研究のモットーとしている、実地に確めてみることの必要を改めて痛感した。バスにゆられながら、平安の昔大神惟基の嫡子高千穂太郎政次の一行が、緒方から三田井の経路に赴いた道も大体この辺りかと、馬上に鞭を上げる若武者を想った。

五ヶ所高原のウエストン碑の建つ展望台から、西に阿蘇の五岳、北方至近の所に祖母の霊峰、南東はるかに九

州山脈の山々を望む豪壮な眺めは、けだし九州の絶景の為に恥じぬものである。

私は高原台地に一種の御慈親近感を抱くものであるが、佐伯地方では此の景観に接することは出来ない。古代人は不健康地であり、猛獣毒虫等の害の多かつた低湿の地よりも、かろやかとして快適な高原に居を定めることが多かつたと云われている。

高千穂の遺跡は神話と伝承にもとづくものであるが、高天原といい、天孫降臨の地といい、いずれも高原であつたと思われる。高天原が雲の上でなく、当時の文化の中心地を意味したことは定説である。高千穂の地は太古かる人類居住の適地として、風光絶佳の峡谷と共に開けていたことは否定出来ない所である。

（以上）

御案内感謝
竹田市　北村清士先生
衛藤芳人先生
高千穂　沢武人先生
清純な感謝のかずかずありがとうございました。

（参加者）

平田幸一　山本正直　若杉吉祥　河野典一　平川繁　高木嘉吉
かみ蔦徳一　沢将信美　勝原房子　伊賀重雄　辰巳捨夫　休石博美　岩田正城　岩田善市
羽柴弘　深矢勘蔵　高木夫人　五十川千代見　小野英治

俳句

借方、竹田、高千穂へ

会員　吉田長民子

鳴り落つる飛瀑にすイヤガラ思う
瀧の上にしきくしぶきの巻き上る
淀となる水根を洗う柳柳
荒城の月の城址の木の芽かな
春日の城壁に佇ち遠き世を
河原のやり礼拝堂浅き春
軍神のカツター古りて春寒し
筆塚にからまる葛の芽はいまだ
町出るも入るもトンネル木々芽ぐむ
山焼きの煙にかすむ猫嶽のぞむ
末黒野へ行くらし赤き牛親子
既穴に淀める渓の水温む
峡谷の深きに春の日は射さず
絶壁の空春日の薄曇り
茶の花も千水遶く紋屋に耕耘機
屋根替の男目屋根を叩きをり
屋根替の女茅草突き上ぐる
神杉は樹令八百　木下闇
岩戸社の神代銀杏芽吹きそむ

記録

海福寺から高畑を歩く

―四月定例訪問史談会―

四月五日快晴（土曜）午後二時　鶴岡小学校に集合、先ず海福寺を訪う。

登り道の左側に見る「寛文、延宝、元禄」年号のある古い墓にしばらくは会員の足がとまる。

山門も古い。両側についている「昇龍、降り龍」の古び方、楼上の梵鐘などでいかに見る。幸い今日は田中住職も居られ墓地を案内していただく。

一説は書院に掲げられ、拝観をいただきながら、お寺の歴史を伺い「遠代伝法仏祖名簿」を拝見する。法堂はいつまでも厳かに守りつづけられていることを伺い、仏教の伝説の義南さに心をうたれる。又歳長七年以来の過去帳を拝見する。知つた人の戒名も数年を経なつかしみつつめくる。

お寺を辞して早速神社に上り、次に坂山の観音院などの小さなお堂に不動明王と観音さまの木彫仏像を拝する。先刻お寺で見た過去帳の中の梅大僧都守世院殺、（宝永七年）にかかりのものであろうか。

高畑（たかばたけ）では先ず大庄屋宅と深矢家墓地を訪い、小田井姫剣さまの恩人深矢駿蔵、その他歴代大庄屋のお墓をしらべその墓誌銘を読む。約一時間がなくて、採録の余裕はない。

深矢家を訪いその広い庭園を拝見した。数庄の殿は五分咲き、樹石古びて趣きふかく、谷水を引いた泉水の中には巨きな緋鯉が悠然と泳いでいた。

この方たちは昔の下野村で、この深矢家は日州耳川戦死の深矢良記の孫、大庄屋としての名家である。

（おそくなつたので野外は長日に残し、ここで解散）